武田宗久先生と加曽利貝塚と私

後　藤　和　民

想えば、武田先生と私とは不思議な御縁であり、二人の間には、常に加曽利貝塚が介在していたようである。

1963年４月、立正大学で行われた日本考古学協会第29回総会において、一人の考古学者が「加曽利貝塚の発掘と現状について」研究発表を行った。その前年における加曽利貝塚の発掘成果を坦々と語る口調は、いささか悠長で、つい睡気を誘うほどであった。ところが最後の「現状」の段になると、にわかに陽焼けした顔を上げ、メガネの奥から炯々たる眼光で会場をにらみつけながら、「加曽利貝塚は日本のポンペイです。それを無下に破壊しようとする今日の開発こそ魔神の暴挙です」と叫んだ。この気魄に、思わず眼を見張った。当時明治大学の考古学専攻の学生であった私の、これが武田先生とのはじめての出会いである。

この研究発表を契機として、日本考古学協会をはじめ、文化財保護対策協議会および加曽利貝塚を守る会などが全国的な署名運動を展開し、国会請願を行った。その結果、千葉市は北貝塚を含む約5.5ヘクタールを都市公園として買収保存した。残る南貝塚については、その学術的価値を確かめるため、1964年８月より日本考古学協会選出の加曽利貝塚調査団によって、大規模な緊急調査が開始された。私も明治大学の大学院生（班長）として動員された。しかし各大学の班長たちは、その破壊を前提とした発掘法に疑問を抱き、もともと加曽利貝塚は南・北両貝塚を合わせて一つの遺跡で、一方だけを保存しても無意味であるとの観点から、南貝塚の保存運動を全国的に展開した。

その結果、南貝塚の緊急調査は中断されたが、千葉市は保存された北貝塚を野外博物館として整備する計画を急いでいた。その加曽利貝塚博物館の建設準備のため、その担当学芸員の候補者として、なぜかこの私が調査団から千葉市に推薦されたのである。

1967年４月、千葉市文化財保護審議会の席上で、新規採用者として私は委員にはじめて紹介された。目前にあのいぶし銀のように陽やけした顔があったので、私はひどく緊張していたらしい。どんな自己紹介をしたのか全く記憶にない。ただ意外にもメガネの奥の眼が優しく頬笑み、「いい人に来て貰って千葉市も助かるよ、よろしく頼みますよ」といわれ、思わず少女のように赤面してしまったことを覚えている。それが武田先生との初対面であった。

聞くところによると、先生は甲斐武田氏の分流で、房総に渡った長生郡長南城主の末裔であるという。黒光りするほど陽やけした風貌、悠々として動じない態度、物静かに吶々と語る口

調など、中世の古武士然たる風格がある。そのせいか、陰で「殿様」という渾名がある。しかし、その穏やかな微笑みの底には何ものにも怯まぬ信念とどこまでも諦めぬ執念が潜んでいたのである。

私は修士論文を書くとき、はじめて『千葉市誌』なる本に出会った。1950年ごろの編集であるから、他の市史と同様、考古学の記述はほんの付足し程度であろうと思っていた。ところが、原始時代から古墳時代、王朝時代に至るまで、全体の約3分の1を武田先生が執筆しておられる。当時の楠原信一教育長のお話によると、当初武田先生が書き上げられた原稿は、なんと600ページ分にもなり、それを何度も懇願して、やっと200ページに割愛して頂いたのだという。

しかも、その内容がきわめてユニークである。例えば縄文時代の叙述において、当時の原始社会を解明するため、その基盤となるべき集落を、一つの社会組織として捉えようとしておられる。この観点の延長にこそ加曽利貝塚の存在意義があり、そこに将来の研究の可能性が秘められていることを予測しておられたのである。当時としては、まさに炯眼といわねばならない。

1970年、千葉市は南貝塚の保存は、貝層部ぎりぎりの約4ヘクタールの買収をもって完了とし、残る東側傾斜面の約4ヘクタールは老人ホーム建設用地として買収していた。従来の考古学界では、この東側傾斜面は遺跡の範囲外であろうというのが一般的認識だったからである。しかし、東側の坂月川から南・北両貝塚に至るには、どうしても東傾斜面を通らねばならない。集落の立地や生活環境としては、これは不可欠な空間であり、当然遺跡の範囲として捉えるべきである。武田先生の御意見を伺うべく、早速お宅を訪ねた。

興奮した私の話を黙って聞いていた先生は、静かな笑みをたたえながら、「まあまあ、焦っちゃだめだよ。折角の正論も反感を買って無視されてしまっては水の泡だよ。そこは慎重に説き伏せていかなきゃ、ダメだよ」といわれる。その悠長なところが、私にとって歯がゆくてならない。そこでまず、東傾斜面に遺構や遺物があるかどうかを見究める「遺跡限界確認調査」を行うことにした。そして、先生は文化財保護審議会でその必要性を説き、武田先生を団長に、加曽利貝塚博物館の学芸員が中心になって、その確認調査を行うことになった。

その結果、東傾斜面のどの地点を試掘しても、早期から中期にかけての炉穴や住居址群が展開していることが確認され、ここも加曽利貝塚の遺跡範囲として買収保存すべきであるとの結論に達した。早速、日本考古学協会、全国文化財保存協会および千葉市の遺跡を守る会などが結集して、全国的な署名運動を展開した。そして武田先生は文化財保護審議会で、この東傾斜面も国史跡の範囲として追加指定すべきことを主張されたのである。

1969年ごろから、新しい『千葉市史』の編纂事業がはじまり、武田先生と御一緒に私も委員の一人に加えられた。担当分野を執筆するにあたり、改めて古い『千葉市誌』の武田先生の叙

述を読み返してみた。従来の他の市町村史の考古学関係の記述は、専門家以外には理解できないような考古学的事実の羅列が多かった。ところが武田先生は、考古学的事実を多角的に駆使しながら、それによって当時の人びとの血の通った生きざまの歴史を如実に叙述しようと努力しておられる。この基本的な態度に倣って、私も『千葉市史』において、できるだけ血の通った「歴史叙述」を試みたつもりである。

また、この市史編纂事業の一貫として、千葉氏研究のためには不可欠な、千葉氏発祥の地といわれる大椎城址の測量調査を加曽利貝塚博物館が担当することになった。このとき武田先生はわざわざ現地に足を運ばれ、私の説明に熱心に耳を傾けておられた。それ以来、中世城郭に一方ならぬ興味を抱かれた御様子。私が休日を利用して、公民館主事の星野忠雄氏の車で二人で千葉県内の中世城郭を個人的に踏査していることを伝え聞いたらしく、先生もぜひ同行したいとおっしゃる。それ以来、月に１、２度、３人で夷隅郡の万喜城址や長生郡の大柳城址などに出掛けて行った。当時すでに60才を過ぎていた御老体ながら、飄々として山城を登られる。その体力や気力に驚嘆する一方、なぜこんなに中世城郭に御執心なのか、それが不思議でならなかった。

1978年、私は千葉市史跡整備基本構想策定の特命を受けて、突然市の文化課に配転された。翌年、各分野の専門家10数名に委嘱して、千葉市史跡整備委員会を設置し、その運営を担当した。当然ながら、武田先生にも委員をお願いした。当初社会教育部では、加曽利貝塚の整備計画の策定だけが当面の目標だったらしい。しかし私は、千葉市には加曽利貝塚以外にも、荒屋敷貝塚や月ノ木貝塚をはじめその他の各時代・各種の貴重な史跡が多数存在している。これらを個々別々に、その都度整備の方途を考えるのは無意味である。むしろ、千葉市の歴史や文化の全体像を捉えるために必要なすべての史跡を総合的・有機的に把握して、その中にこそ加曽利貝塚を位置づけるべきだと考えたのである。

その旨を伝えて、武田先生に御相談をしたところ、「それはいいね。それが正当なんだけど、市当局がそんな巨視的な観点から、長期にわたる事業計画というものが理解できるかが疑問だなぁ」と、首をかしげておられたが、「まあ、やれるだけやってみるさ、一つ一つ実現してゆけば、道はおのずから開けてくるかも知れないな」といって、いつにもなく朗らかに笑われた。それ以来「基本構想」に３年、「基本計画」に３年、「基本設計」に３年、そして「実施設計」に３年、通算なんと12年もかかったのである。

その間、私は現地主義を貫き、常に委員会の大半を現地で遺跡を前にしながら、各専門分野からの検討や分野相互間の討議などを行って貰った。それも、縄文、弥生、古墳、中世……と各専門分野別に行うので、月に２～３回、年に20数回にも及ぶこともあった。ところが、武田先生だけは毎回、全分野に参加され、あらゆる遺跡を常に熱心に踏査しておられた。とくに中

世城郭に関しては、自然保護関係の沼田　真千葉大学教授と中世城郭関係の小室栄一明治大学教授と共に、武田先生も必ず参加しておられ、その執念と粘り強さに感嘆していた。

ところがある日、上和泉町の女城城址から帰る車の中で、先生から「ところで後藤さん、長生郡長南城のことなんだがね、何度登ってみても私にはよく判らないんだが、あの城郭は小室先生の分類でいうと、どのタイプに当てはまるのかね」と聞かれた。それまで、武田先生みづから長南武田氏のことを口にされたことは一度もなかったが、やはり先生は御先祖のことを常に気にしておられ、ひとり秘かに探査しておられたんだなと、そのときはじめて納得したのである。

1990年、私が館長として加曽利貝塚博物館に戻ってからは、「実施設計」に基づく加曽利貝塚の具体的な整備工事が相次ぎ、繁忙のあまり、逆に武田先生とお会いする機会が乏しくなった。とくに1992年に私が定年退職し、八王子の創価大学に赴任してからは、ますます疎遠になってしまった。

1996年、東京都北区の中里貝塚で、かつて私が掘った都町の宝導寺貝塚に類似した巨大な貝層が発見された。それを機会に、集落を伴わない巨大貝塚についての講演を頼まれて、久々振りに加曽利貝塚博物館を訪れた。そのとき、わざわざ武田先生のご来駕を頂き、いたく恐縮したことがある。先生は数年前と少しもお変わりなく、例のいぶし銀のように陽やけした古武士然たる「殿様」のままであった。お元気そうな御様子にホッとすると共に、なぜか久し振りに故郷に帰って、父親と再会したような、そんな懐かしさに胸がしめつけられる思いであった。

武田先生とお会いしたのは、それが最後となった。

武田先生との想い出は、まだまだ数えきれないほどあって、所詮すべては語れない。

想えば、私は幸いにも加曽利貝塚がとりもつ縁で、武田宗久という偉大なる郷土史家に出会うことができ、その先生のお陰で、加曽利貝塚という偉大なる「日本のポンペイ」と出会うことができた。武田先生と私ほど、加曽利貝塚と縁が深く、加曽利貝塚をこよなく愛し続けた者はほかにいなかったのではなかろうかとさえ思われる。

2001年3月3日、武田宗久先生は忽然として帰らぬ人となられた。もう二度と再びあのいぶし銀のような古武士とはお会いできない。しかし、加曽利貝塚という史跡が存在するかぎり、武田宗久という「殿様」の名は消えることはない。いや、いまこそ後に残されたわれわれは、加曽利貝塚の今後の保存と整備のゆくすえを先生に見守って頂くためにも、加曽利貝塚の入口に、武田宗久先生の銅像を建立して、あの穏やかな笑みを永遠に刻むべきではなかろうか。

合掌

（元 加曽利貝塚博物館館長
現 創 価 大 学 教 授）